OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	語りと沈黙 : 表現を理解するとはどういうことか
Author(s)	菅野, 盾樹
Citation	大阪大学人間科学部紀要. 1996, 22, p. 267-296
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/11552
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

語りと沈黙

——表現を理解するとはどういうことか——

菅野盾樹

目次

1 グライスの「反射的意図」の混乱
2 反例か、パラドックスか
3 〈毀れたドライヤー〉のパラドックス
4 字義性原理とポリフォニー
5 黙説のレトリック
6 公然性と沈黙の声
7 「完全な表現」の幻想
8 公然性と黙秘権
9 水準の現象

語 り と 沈 黙

――表現を理解するとはどういうことか――

菅野 盾樹

1 グライスの「反射的意図」の混乱

スペルベルとウィルソンはグライスの「反射的意図」という観念を受け継ぎつつ自分たちの理論を構想したが、そうする中で、新たにこの観念を〈I意図プラスC意図〉の複合として鋳造しなおした。ところが、これで一件が落着するわけではない。彼らは、この概念の装置ではまだコミュニケーションを実現するには不足であるかのような口吻を洩らしている。

読者にとってこの意外な事実は、彼らがグライスの分析を評価する場面ではやくも表沙汰となる。スペルベルたちによると、「グライスがコミュニケーションに課した条件はある意味ではきつすぎるし、他の意味ではゆるすぎる」ものだという[1]。前半の「きつすぎる」(too restrictive)という指摘は、グライスが「非言語的コミュニケーション」なるものを容認していないことを念頭になされている。グライスは、意図の公然性が言語の〈語り〉にとってのみ可能だと誤認していた。そのせいで彼は、身振りや表情は「非自然的意味」をなさない、と断定したのであった。しかし言語とその他の表現との連続性を認める有意性理論の見地からすれば、グライスのこのやり方は不当に厳しいと言わざるをえないだろう。以上は、私たちがすでに確認したところである。なお付言するなら、グライス記号論の枠組みが「きつすぎる」ことは、〈永久機関の事例〉(d)やフィクションの事例(e)が「非自然的意味」をなす表現からこぼれ落ちざるを得ない、という仕儀にも示されている。

ところで、後半の「ゆるすぎる」(原文の not restrictive enough をあえてこう訳そう)、の指摘はいささか解りにくいのではなかろうか。このコメントは、私たちの理解するところ、後で詳しく見ることになるが、事例(b)や(c)の扱いにかかわる。グライス記号論からすれば、これらの事例は言語現象とはいえない。幼い娘が割ってしまった陶器の破片を床に並べたままにしておく父親のパフォーマンス(事例(b))は、言語の語りにメタ意図の公然性を独占させ、そしてメタ意図の実現が言語の必要条件とみなすグライスに言わせれば、この行動が言語の域に

達していないのは明かだからである。ところが、スペルベルたちの評価では、グライス記号論の枠組みは、これらの事例を言語現象から排除するに足る厳密さをそなえていない、という。グライスの表向きの言い分とは異なり、純理論的に判定するなら、それらの事例は言語の領域に含められることになるというのである。

グライスに対するスペルベルたちの評価を私たちの立場から誤りなく評価するために、私たちとして再度グライスのテクストに目を転じてみる必要があるだろう。論文の途中まで読みすすんだ読者は、前半部で示した自分の見解がじつは不十分なものにすぎなかったのだ、とグライスが告白する件(くだり)に遭遇する。ここでグライスが自分の見解と呼ぶものは、すなわち「伝達意図とメタ意図とを合わせてはじめて話し手は何かを非自然的に意味することができる」という考え方のことである。これこそグライス流の記号論の核心をなす洞察にほかならない。しかし、いまやグライスは「これは、おそらくいくらかましな考えだが、十分とは言えない」と漏らすのだ[2]。その後につづけて彼はひとしきり議論をおこなう。そして繰り広げてきた考察にいよいよ締め括りをつける後半の箇所で、彼がまたもや前言を翻しているとしか受け取れない言辞に終始していることを見出して、読者は途方に暮れるのである。すなわち、グライスははじめの意図の分析でやはりうまくゆくというのである[3]。一体、本当のところはどうなのだろうか。

ここに露呈した混乱は真実グライスのものなのだろうか、それとも読者がグライスのテクストの場に勝手に引き入れたものにすぎないのだろうか。真相をはっきりさせるために、ここで考察すべき論点が少なくとも二つある。第一に、「反射的意図」という構想がそもそも混乱を招きがちなのではないだろうか。もしも意図がメタ意図を要求するなら(公然性の公理)、メタ意図も意図であるかぎり、それもまた別の意図を要求するだろう。だとしたら、意図の階型は果てしなく積み上げる羽目になるだろう。しかしこれは、有限の時間に営為をくりひろげている人間には、所詮かなわぬ難題ではないだろうか。もちろんグライスはこの点に気づいている。だからこそ彼は、二つの意図が互いに「独立ではない」(these intentions are not independent)と付言しているのであった[4]。話し手は、伝達意図が聞き手によって認知されることを意図するが(メタ意図)、聞き手によるこの認知は、実は伝達意図が実現されるために役割を演じるのである。換言すれば、問題の二つの意図を抽象的に分離するのは誤りであって、それらはかの認知によって媒介された、表裏一体をなすただひとつの意図というべきである[5]。私たちとしては、意図の一体性の強調というグライスの論点には諸手をあげて賛成する。私たちが言語の意図をひとつの〈L意図〉として理解するゆえんである。

しかしながら、見過ごしてはならないのは、L意図が、グライス流の記号論とは別種の哲学を要求することである。もうひとつの意図の哲学がないかぎり、グライスの言説の希求するもの(〈言語の意図〉)、そしてそれが実際に読者に恵与したもの(〈伝達意図とメタ意図の認知による複合〉)、この二つのものの差異は、混じりけなしの金貨とその拙劣な贋金の差異にもひとしい。同じ「言語の意図」に基礎を置く記号論ではあっても、グライスの構想と私たちのそれとがかもす〈対比〉は手が切れそうなほど鋭い、と言わざるをえない。この先鋭さのひとつの表現

は、すでに見たように、言語の意図に関する〈反射性〉、あるいは誤解を招きやすい言い方だと〈自己言及性〉と〈階型性〉との対比となるだろう。

正統的な記号論の深部に達しているこの修復不可能なひび割れは、もとを糺せば〈示し〉の記号機能を軽視してきたという、記号論の不幸な来歴に起因している。〈示し〉が要求する論理は自己言及的タイプのものであって、メタ言語的タイプのものではない。自明なことを今更らしく言うのも気が引ける思いがする。だがそこをおして言えば、記号によって認識をいとなむのは、超越論的意識でもなければ物理作用の座としてのメカニズムでもなくて、身体をそなえ世界に投錨する私たち人間であることを、記号論の探究はかたときも忘れるべきではないだろう。認識とは記号の機能にほかならない。この機能は世界に内属する記号によって運ばれるのであり、この機能によって認識されるものは、世界ないしはその側面である。認識は事物からなる実在論的世界のただ中で生じる因果作用ではないが、かといって、世界を越えた特権的な座から俯瞰された純粋な光景でもありえない。認識を営む身体は、まさしく世界に住みつくという様式で世界からなかば身を引き離すことになるのだし、認識される世界は、認識の内容として身体に同化されながら依然として身体を包み続けるわけだ。認識は一つのパラドックスなのである。いつでも認識は、包むものと包まれるものとが交差し合う一種の曖昧さの中で成就される。私たちが「意図の反射性」と呼ぶのは、まさしくこの曖昧さのことである。

第二に、グライスの「意図の認知」という観念がひとつの区別を無視している点を指摘しなくてはならない。ある意図が実現しない事例について、グライスはその意図があるとはいえないケースと、意図はあったが充足されなかったケースとを区別していない。(ちなみに前者のケースにはさらに二別がある。すなわち、(1)そもそもどのような意図もないケース、(2)意図があるかどうか、その有無が原理的に不確定であるケース、の二つである。)表情や身振りが「言語」ではない理由としてグライスが本来あげるべきであったのは、表情や身振りにはメタ意図がともなうとは必ずしもいえないという点であろう。換言すれば、前者のケースのように、意図があるとはいえない表現の事例は、たしかに言語ではないことになる(典型的なのは、(a)の例である)。ところで〈永久機関〉の例(d)についてはどうだろうか。これがグライスの意図の分析に対する「反例」でありうるのは、伝達意図が充足されないからである。発言が聞き手の側になにも効果を生まないかぎりで、話し手の意図はいわば空振りに終るのだ。言語の意図の構造を観察する場合、それをグライスのように条件のセットとして析出したいなら、その意図が充足されたということを分析の前提に持ち込むのはルール違反ではないだろうか。この点をグライスの論文は曖昧なままにしている。

一般に「条件」という用語が二義的であることに留意が肝要だろう。この語は、一つには、ある種の要請(requirement)を意味する。二つには、要請されたもの(the thing required)を意味する。例えば、離婚の条件として妻が夫婦の資産の半分を夫に要求したとしよう。この場合の「条件」とは、第一の意味では〈資産の半分を与えよ〉という要求であるし、第二の意味では、要求された〈資産の半分〉のことである[6]。要求がないこと、あるいは、要求が無力化して無いも

同然であることと、要求されたものが与えられないこと――この二つは別々のことである。換言すれば、意図の実現に関しては、条件の欠如とその不充足を区別する必要があるのに、グライスはこれを怠ったのではなかろうか。

そこにはまた、意図の構造に関するグライスの錯誤がともなっている。グライスが二つの意図の複合を見いだしたとき、これではまだ十分でないとしたのは、いくつかの反例が排除できないと考えたからである。彼が掲げた複数の例を代表するとおぼしい〈割れた茶碗〉(表の(c))についてはすぐに述べたい。ともかくグライスはそう考えて、排除の策を探したのであった。その結果彼が持ち出した方策が、論文後半の「意図の認知」という観念であることを私たちは承知している。しかし、意図が認知されないということは、意図が充足されないこととどこが異なるのだろう。意図の認知という条件は、一つには、意図が聞き手によってキャッチされ効果を生むべしという要求を意味する。第二にそれは、意図が聞き手によってキャッチされ効果を生むという事態を意味する。ところで、意図はキャッチされた途端にある意味で成就するのではないだろうか。にもかかわらずグライスは、意図に過剰な条件を負わせたのではなかろうか。

意図が聞き手に把捉されればそれだけである種の「効果」が生まれるものだ。例えば、連日終電車前に帰宅もままならない多忙な商社マンの夫にむかって

せめて今日は夕飯に間に合うように帰宅してね

という妻の言葉には、ありありと彼女の言語的意図を見て取ることができる。流石の夫も今日ばかりは胸の底に重くそれを受けとめるかもしれない。この発言の意味を夫は明瞭に理解するし、その力は彼に確実に見舞われる。だがそれは、今回も多分仕事で午前様になるだろうという夫の信念に何の効果を生じることもないし、ましてこの発言が実際に彼の早い帰宅を保証するわけではない。そうだとしても、発言の意図が夫にキャッチされるかぎり、妻の心からの要請は彼の心に達するだろう。

もちろん問題は意図の心理学をめぐるものではない。むしろ意図の論理構造なのである。意図がときに充足されないこともあるという可能性は意図の構造には無関心なはずであるし、そもそもこの充足のなかみとして、意図の把捉とは別の有効性を仮託するのはすじが違うのではないだろうか。もちろん「意図の認知」――正しくはその〈充足〉――の考察が意図について多くのことを教えてくれることは明らかである。しかし、その種の心理学的考察は、意図の構造が確保されて初めて実地に移されるものにすぎない。

2　反例か、パラドックスか

グライスがもちだした、自分の分析に都合の悪い例のひとつである(c)を検討しよう。居間の床に陶器の割れた破片が散らかっているのを私がみとめたとする。それは妻が珍重している茶碗なのだが、幼い娘が卓上から落として破損してしまったのだ。私は陶器の破片を故意にそ

こらに散らかったままにしておく。〈娘が茶碗を壊してしまったこと〉を妻に自分の目で確かめさせるためである[7]。この例に関しては、破片をそのままにしておくという私の不作為につまづいてはいけない。不作為もパフォーマンスとしては入念な作為と変わるところはないからである。この誤解を避けるために、私が一旦は破片をかたづけたにもかかわらず、わざわざもう一度これ見よがしに破片を床に――落ちて割れたかのような自然さを演出して――配置し直した、と想像してみるのもいいだろう。そのようにしたのは、もちろん私に含むところがあったのである。私の行為が伝達意図とメタ意図の双方をともなうことは言うまでもない。私は妻に(私ではなく)娘がこの高価な茶碗をこわしたのだということを伝達する意図をもっている。幼い子どもの遊ぶ場所にそれを放置したのがそもそも間違えだった、とも言いたいと思っている。そのうえ、私はこの意図を彼女にキャッチして欲しいという意図ももっている。いずれの意図も私のやり方を見た人には明明白白である。もちろんそれらの意図を誤解することはまま生じがちだが、いま問題なのは、意図がそもそも明白である可能性、意図の明らかさそのものである。

私たちに言わせるなら、この可能性をアプリオリに否定することはできない。そうである以上、当面の考察を次の問いに集中すべきである。そもそも表現意図の公然性はいかにして可能なのだろうか、そしてこの種のケースでは――グライスの言うように――意図の公然化は事実上つねに不可能なのだろうか、と。

私が実演したパフォーマンス(performance)と「これを割ったのは娘だ」という発言(utterance)の表現能力の差は埋めようがないほど大きい――そうグライスは断定する。発言の場合、表現の意図はつねに明白であると同時に実効性をもつ。つまり発言の意味はそのとおり理解される。ところが〈割れた茶碗〉の例では、意図は明白なのにその効き目がさっぱりないのである。それゆえ、このパフォーマンスがある種の意味を発揮するとしても、それは「非自然的意味」ではない。言語が表出する類の意味ではないのである――こうグライスは結論する[8]。

発言の意味する力とパフォーマンスのそうする力が異質だというグライスの評価は――有意性理論が示唆するように――誤りである。グライス記号論の枠組みは「きつすぎる」のである。とはいえ、この事例をグライスの分析に対する「反例」と見なしてはならない。彼は表向きには「意図の認知」とか、黙示的には「意図の階型性」や「意図の公然性」といった観念を算段することによって、分析のほころびを繕うことができたつもりでいる。もしそれが本物の〈反例〉であるとすれば、グライスのこのような理論的処置はまっとうであったと判定しなくてはいけなくなる。しかし、この例は実のところ「意図の記号論」に降りかかった〈パラドックス〉ではなかろうか。この理論の眼から見ると、この例は言語の意味(非自然的意味)を表わすようにも映るし、逆にそうではないようにも映る。換言すれば、理論のひらく視野の中で「この例は言語の意味を表わす」という命題とそれと矛盾する命題が、まったく等分に真であるように思えるのだ。〈パラドックス〉は必ず始末すべき厄介な荷物とばかりは限っていない。それは時には理論にとって有益な働きをすることもある。既成の理論に伏在する不都合な部分を暴露しその是正

の手だてを示唆してくれるという働きである。〈パラドックス〉はしばしば理論の病に対する診断と治癒の暗示機能をもつのである。では〈割れた茶碗〉の事例はグライスの記号論のいかなる疾病を指しているのだろうか。いうまでもなく、まずもって「意図の認知」を初めとするもろもろの観念であり、とくに言うなら〈語り〉に表現意図の公然性を占有させるという臆断である。

スペルベルとウィルソンもまた、この〈割れた茶碗〉のパラドックスに酷似するもうひとつの事例に対して、終始曖昧な評価しか下すことができなかった。これは、有意性理論の可能性を称揚することにやぶさかではない私たちだからこそ、決して看過してはならないことがらである。彼らが俎上にのぼせた事例を節を改めて検討することにしたい。そのことを通じて、グライスが代表する古典的な記号思想のどこに問題がひそんでいたかがいっそう明らかになるだろう。また、これを乗り越えようとしたスペルベルたちの試みが、同じ過ちのために〈言語への道〉を踏み外しどこまでも遠く逸れてゆくかもしれない危機に瀕していることを見届けておきたい。

3　〈毀れたドライヤー〉のパラドックス

有意性理論の試金石といっても誇張ではないその事例を、〈毀れたドライヤー〉の事例と呼ぶことにしたい(冒頭のリストでは、(b)として掲げておいた)。それは次のようなものである。メアリは自分のドライヤーが毀れたのでピーターに修理して欲しいと思っている。しかし彼女は素直に(openly)口にだしてピーターにそう頼むことをしない。彼が面倒臭がって申し出を拒むかもしれないし、それがきっかけでちょっとした諍いをしてしまうかもしれない。わざわざ口頭で頼むことをしないでも、(大袈裟だと人は言うかもしれないが)自分の窮状を察してくれてもいいではないかという思いもある。そこで彼女はひと芝居を打つ。その辺りにドライヤーの部品を並べて、あたかも彼女が自分で故障した器具を修理している最中であるかのように見せ掛けたのである。

このパフォーマンスで微妙なのは、実のところ彼女はこの芝居にピーターが乗せられてしまうことを期待していないという点である。それというのも、もし彼が現場を見て芝居と現実とを混同したら、つまり彼女が文字どおり自分でドライヤーを修理しているのだと信じたとしたら、多分、彼女の手助けをしてはくれないだろうから。ピーターとすれば、彼女が修理している器具に自分の方から手を出すのは、差し出がましいと言うより、無用なことに思えるだろう。メアリが真実願っているのは、このパフォーマンスが芝居にすぎないことをピーターが見破って、なぜそんなわざとらしい事をしたのか、彼女の真意を理解して欲しいということだ。しかし同時にメアリは、彼女のこうした思惑を彼が悟るのは好ましくないとも思っている。もし彼が、彼女の表現は仮構にすぎないのだと、そしてこんな遠回しなやり方で暗に彼に援助を求めているのだと察してしまえば、彼は差し伸べた手を引っ込めてしまうかもしれない。例え

ば、彼は「なぜはっきり言ってくれないのだ、水臭いな」と憤慨するあまり、事態をそのまま放置する恐れもある……。こうして彼女の思いは千々に乱れる。変則的な彼女のパフォーマンスは、このいささか乱調子で入り組んだ意図の表現だと見なしうるだろう[9]。

スペルベルとウィルソンによれば、この事例はグライスの分析をくつがえす「反例」にほかならない。〈割れた茶碗〉の私の場合と同じように、彼女のパフォーマンスには、表現をおこなう者の伝達意図とメタ意図の複合 —— これはおおよそI意図プラスC意図の複合に相当する —— がそなわっている。メアリはピーターに器具の修理をしてもらいたい(伝達意図)のであり、この意図をピーターに解ってほしいからこそ(メタ意図)、わざと姑息な手段に訴えたのであった。そして確かにピーターによる「意図の認知」がなされることは、十分に可能である。かくしてこの例は、グライスの条件をすべて充たしていることがわかる。

しかし人はこのパフォーマンスが「非自然的意味」を表わしていると評価するのには気後れを感じざるをえない。いったいなぜだろうか。なぜこの事例は〈コミュニケーション表現〉になりえないのか。スペルベルたちは、グライスの分析を批評したストローソンの指摘を受け入れて[10]、メタ意図(ないしC意図)が公然と(overtly)表明されていないことをその理由にあげている。メアリが自分のメタ意図をピーターから隠蔽しているそのかぎりで、たとえピーターが、事実、彼女の真意を察することができたとしても、彼女の身振りは言語的意味をついにもちえないというのである[11]。

私たちに言わせるなら、有意性理論の提唱者たちがここで無造作に〈メタ意図〉と〈C意図〉を同じものであるかのようにいうのは不可解でしかない。もし私たちの理解がこの豊饒であるはずの理論に真に届いているなら、グライスの意図概念はスペルベルたちのそれとは本質的に異なるはずだからである。グライスの構想が素朴な主観主義的·心理主義的傾斜を示しており、そこからさらに特有な存在論的制約に落ち込んでゆくいきさつを私たちはすでに垣間見た。それは客観主義ないし実在論とあだ名される見地であった。これにひきかえ、有意性理論にはこうした傾斜と制約を突き抜けようとする暗黙裏の志向がはっきりと示されている。著者たちに必ずしも自覚されているわけではないが、彼らの有意性理論はグライスのものとは別種の存在論的制約を引き受けようとしている。私たちはそれを非実在論(irrealism)ないし内部存在論(endo-ontology)と呼ぶだろう。

著者たちの望まない「立場」や「主義」を他人が無理強いするのは、もちろん慎むべきだろう。しかし実際にスペルベルたちはこの「反例」を教訓として、旧来のグライス流儀の記号思想の外部へと歩み出ようと試みている。その努力の跡は、コミュニケーションの〈非対称性〉、〈想定〉(assumption)、とくに現象の〈明白さ〉(manifestness)などの、あまり見慣れない概念の彫琢にうかがうことができるだろう。これらの概念が古典的な理論枠組みを拡張するのに役立っているのは確かである。とはいえ、有意性理論のこの側面は哲学的基礎にまで掘り下げて最終的評価を下すにはあまりに入り組んでいるし、そうした解明はそもそも私たちが従っている狩りの目的にはそぐわない。むしろ、論点を絞れるだけ絞っていわば問題の痛覚を子細に調べること

が、今回の狩猟――それは、三種を数える記号論のタイプをめぐる、言ってみれば比較記号思想の試みにほかならない――にとっては得策だろう。

単刀直入に言って、問題とすべきは〈C意図の隠蔽〉という観念である。私たちは、L意図をいくつかの因子――伝達意図とメタ意図、I意図とC意図――に分けることは説明の便宜にかなっていると考えている。しかしそれらの因子をそれ自体が独立して存在する事物(アリストテレス風にいえば「実体」)のように見なすのは、説明の節度を踏み外しているのではないか。それらの因子は一体となって言語の意図の構造をなしているのであり、重ねて言えば、I意図とC意図はいわば表裏一体なのである。〈C意図の隠蔽〉という観念は、あたかも一つの因子を本体から自由に抜き出すことができるような響きをともなう。率直に言ってそれが何を意味するか私たちには分からない。ではスペルベルたちはどのような意味でこの事例がこうした観念に合致するというのだろうか。明らかに、メアリが修理の依頼を言語で実演していない、という意味でしかない。彼女が自分でどうして欲しいかをピーターに言葉で語っていないかぎりで、C意図の公然性が――どんなに小さく見積もるにせよ、決定的に――損なわれているというのである。だとしたらスペルベルたちは、グライスと同じ轍を踏んでいると言わざるをえない。決然と実在論の外部へ踏みだそうとした彼らが、なぜたちまち古ぼけたスタートの地点へ舞い戻るというようなことが起こったのか。それは一つに、彼らが〈示し〉の記号機能に無知だったためである。あるいは、〈語り〉に記号の表現可能性のすべてを占有させる言語中心主義を彼らが真に克服していないためである。

スペルベルたちはテクストの後の方でも〈毀れたドライヤー〉の事例に言及している。読者が眼をみはるのは、なんと、そこではこの例がコミュニケーションの一例に数えられているからだ。〈C意図の隠蔽〉のせいで言語的意味をなさないとされたメアリのパフォーマンスは、ここでは「完全にはコミュニケーションとして機能しない」(not quite communicate)例とされている[12]。この言い方が部分否定であることに注意しなくてはならない。この否定はもちろん当該の事例がコミュニケーションの典型例ではないことを意味している。これはコミュニケーションではあっても、中途半端な例にすぎないというわけだ。それにしても、これがコミュニケーションであることは動かない。なぜなら、ある表現がコミュニケーションであると同時にそうではない、などとは言えないからである。

だとすると、メアリのパフォーマンスにはC意図が公然と(overtly)披瀝されているのだろうか。それとも意図の公然性は程度(grade)を許す比較的な概念なのだろうか。しかしこれは、到底グライスが(そして、グライスに倣って、スペルベルたちが)抱く気遣いのない問いであろう。そもそもグライスは、言語によるコミュニケーションと身振りや表情によるコミュニケーションを截然と分ける条件として意図の公然性なるものを構想したのであって、もしこの条件が程度の問題なら、言語の特権的な地位はグライスの目からすれば失われてしまうだろう。こうして、テクストが紛れもなくひとつの〈パラドックス〉を作り出していることが知られる。それでは、この事例が指し示している〈理論的隠蔽〉とは何なのだろうか。その解明はひとえにパ

ラドックスの解決法にかかっている。

これをどのように解くかについて提案を行うに先だって、まず〈割れた茶碗〉の例とこの〈毀れたドライヤー〉の例が同じ論理的機序をもつ点を確認しておきたい。グライスは〈割れた茶碗〉のパフォーマンスを言語現象とは認定しなかった。それはこのパフォーマンスが、意味内容をあからさまに語ってはいないと考えたからであった。スペルベルたちの視点から述べれば、この例では「言語」以外の表現(ソシュールのいう記号表現 signifiant、ないしパースのいう表現体 representamen)が使用されているのが災いして、とどのつまりC意図の公然性が損なわれるという仕儀になるのである。私が茶碗の破片をご丁寧にもそのままにしておくのは、茶碗を割ったのが誰かを告げ口するようなことをはばかったためかもしれない。私は匿名のままでいようとする。表現の責任を回避するためである。私が表現の上で犯した罪はC意図の公然性への違犯であるということになる。まったく同じように、〈毀れたドライヤー〉の例で問題をかもすのも意図の公然性への違犯にほかならない。スペルベルたちはメアリの犯意を認定したうえで、なぜそんなことを彼女はしでかしたのかとその動機を訊ねている。彼女は彼に借りをするのが嫌だったのかもしれないし、彼に依頼を拒まれるのを恐れたのかもしれない。一口にいうなら彼女はエゴイストなのである。相手の都合もなにもかまわず相手が依頼に答えてくれなくては承知しないエゴイスト、しかも自分ではなにも負担を負おうとはせず、相手があくまで自発的にそうしてくれないと困るという、見事というしかないエゴイストなのである[13]。

4 字義性原理とポリフォニー

私たちに言わせるなら、〈割れた茶碗〉および〈毀れたドライヤー〉の事例はL意図の誤認に起因する偽の反例にすぎない。これが真相であることは、スペルベルたちのテクストが雄弁に物語っている。実を言って、二つの例は理論にとっての〈パラドックス〉にほかならない。グライス流の言語理論(グライスからストローソンをへて、スペルベルとウィルソンへ)は、身体行為による表現(いわゆる非言語的表現)と言語の本質的差異をよりどころとしている。単なる身体の行為では必ず表現の公然性が損なわれてしまう、というのである。はたして彼らは言語的表現とそれ以外の表現の違いを正しく捉えているのだろうか。前述のように、スペルベルたちはこの二分法を本質的には克服できていることを彼らの名誉のために言っておきたいが、残念ながら、著者たちにはそうした問題意識はない。私たちとしても、〈割れた茶碗〉の事例がなにかしら「意図」を隠していることを否定しようとは思わない。その意味では確かにこの例では公然性の公理は遵守されていないと言ってよい。しかしこの事例において隠されている「意図」とは、コミュニケーションを構成する要因ではない点に注意しなくてはならない。それは単に表現のレトリカルな効果にかかわるものなのである。〈娘の壊した茶碗をかたづけずにそのまま妻の目に立つように放置しておく〉という私のパフォーマンスを、字義的な記号表現とみなす

ことは到底できない。要するに、それは一種の比喩なのだ。

表現が字義的であるとはどのようなことをいうのだろうか。ここで字義性について最小限知っておくべきことをおさらいしておこう。表現の解釈に手が染められる初発の段階で介入するのが〈字義性の原理〉である。この原理はもともとレカナティが構想したものであるが、オースティンの理論枠組みにはうまく納まらないように思える。というのも、後者の理論にはポリフォニーの余地がないからである。レカナティの言葉で言うと、それは「ある発語内行為特有の潜在力をもつ行為を遂行する意図が話し手にない場合、話し手は、この発語内行為特有の潜在力をともなう文を発言してはならない」ことを要請する原理、言い換えれば、発言によって表向き遂行されているように見える発語内行為を、その話し手は、実際にやってみせるのでなければならない、と要請する原理である[14]。

例えば、「人間は狼だ」というホッブズ的人間観をにおわせる発言はこの原理に違犯している。この事実は簡単に確認することができるだろう。それにはこの発言が、字義性の原理の要請するとおりのこと、すなわち〈人間は狼だ〉という内容を確言しているかどうかを自問してみさえすればよい。もし字義通りにそのような内容を確言しているなら、この発言はノンセンスを口にしているにすぎない。ある動物種が別の動物種であるなどということは、まったく意味をなさないからである。したがって、この発言には有意性がないと言わざるをえない。にもかかわらず、スペルベルたちの〈有意性の原理〉の要請するように、あくまでもこの発言が有意であるべきだとしたらどうだろう。この発言はもはや字義性の体面を保ち得ないことになろう。実際に、これは人間を狼にたとえた比喩にすぎないのだ。

オースティンは〈言語使用〉(use of language)という観念が、従来ややもすると発言における発語行為(locutionary act)・発語内行為(illocutionary act)・発語媒介行為(perlocutionary act)の三つの次元を識別する理論的視力の妨げとなりがちであったことを指摘した。これにつづけて彼は、この観念がこれら三者より「はるかに多様な事柄にわたる」ことに注意を促した。そうした「事柄」(matters)の例として彼の講義で言及されているのは、冗談、演技、詩作、ほのめかし、などである[15]。オースティンのこの言葉は、ポリフォニー、すなわち字義的な表現が同時に字義的でない音色を響かせるという現象に関する理論を、彼がまだ構築していない真相を我知らず証言するものである。なにしろ発語内行為を初めとする三者をようやく区別できたばかりなのだから、その他の「言語使用」の範疇に着手する余裕はない、という次第なのである。彼は一連の講義でもっぱら字義的な表現を対象に理論の構想を語っている。この限られた理論の枠のなかから眺めると、ポリフォニーが「真面目でない」そして「完全に正常とは言えない」使用、いわば「寄生的な」言語使用であるかのように映るのは是非もないことだった[16]。

ところで、このように言うオースティンは、真面目な言語使用と不真面目なそれとの〈対比〉を基礎づける根拠をどこに求めているのだろうか。彼のテクストには二つを弁別する基準が明瞭なかたちで述べられている形跡は何もない。つまりその基準はいわば主観的にオースティンの脳裏のどこかにあるにちがいないのだが、客観的にはどこにもないのである。いまオーステ

ィンの理論から外に踏出てあらためて問いを立て直そう。いったいこの〈対比〉の客観的な根拠はどこにあるのか、と。

しかしこれに対しては文字どおり「どこにもない」(nowhere)と答えるよりほかはない。換言すれば、表現の理論にとって問題の区別は客観的所与ではないのであって、それは説明を要する現象の一部なのである。確かにこの〈対比〉の軸のまわりを私たちの表現は巡っている。しかしながら、本来の表現理論はこの軸とあらゆる回転のどちらをも説明する課題を負わなくてはならない。私たちの言語を多少とも懇切に観察すればすぐ判明するように、字義的なものがそうでなくなったりその逆が起こったりという事態が、しばしば、おこっている。その〈対比〉の軸は常にゆらいでいるのである。例えば、天動説が字義的に信じられていた時代に人々が口にした

太陽が大地へ沈み、あたりはすっかり暗くなった

という発言は、日常生活の場面ではまだ意味をなすことがあるとはいえ、科学の領域では字義性を失ってしまった。〈不動の大地の下へ太陽が移動してゆく〉という命題は偽りにすぎない。そのうえ、地動説を一本の横糸として織りあげられた「科学的イメージ」(scientific image, セラーズ)は人々の生活世界のすみずみに浸透している。沈む夕陽を眺める私たちがときに感傷にひたることがあっても、私たちは、太陽を生きてはたらく神格とみなしてこれを仰ぎ見た古代人ではもはやない。現在では小学生でも地球と太陽の幾何学的関係があたかも夕陽が沈むかのような外観(appearance)をもたらすにすぎないことを知っている。あるいはそうした描写が単なるものの言いよう(façon de parler)にすぎないのを承知している。セラーズのいう「自明なイメージ」(manifest image)は科学的な知識なしにはありえない。字義性の問題をいっそう複雑にしている要因がここにある。もう一例をあげるなら、最初は比喩にすぎなかった「光は波である」という発言はいまでは物理学の教科書に字義的記述として記載されている。すぐ分かるように、この例は前のとは対比軸のぶれ方がちょうど逆になっている。夕陽の場合には字義的なものが非字義化したのだとすると、光の波動説では比喩的なものが字義化したのである。

オースティンは自分の理論の資質について眼鏡違いをすることがなかった。彼の自認するとおり、隠喩やイロニーを初めとする各種の比喩をオースティン流の言語行為論で扱うことはできないからである。例えば隠喩は一種の言語行為などではありえない(実際、ときどき人はそのような安直なもの言いをするけれど)。その何よりの証拠として、隠喩はものごとの描写に用いることができるばかりか、誓い(「傾いた家業を必ず盛りかえしてみせる」という店主の言葉)、約束(同じ言葉の発語内の力を〈約束〉と解することもできる)、命令(「鶏口となるも牛後となる勿れ」)など、ありとあらゆる発語内行為に登場するという事実がある。隠喩に特有の「発語内の力」(illocutinary force)があるとはとても思えない。ものごとを代表しないことを特徴とする発語内行為(〈挨拶〉や〈感嘆詞〉と呼ばれる決まり文句の大半はこれに含められる。たとえば「今日は」)にも隠喩は用いられる。たとえば「大統領!」や「ちくしょう!」はその一例であ

る。こうしてみれば、隠喩が「一種の」発語内行為であるという安易な見解は残念ながら間違えだと言わなくてはならない[17]。

私たちの論点にはさらに傍証がある。オースティンは、発語内行為のおのおのに発語媒介行為が対応することを説いている。たとえば〈助言〉には〈説得〉、〈命令〉には〈服従〉が対応するという具合に[18]。ところで、隠喩まじりの言明によって遂行される発語内行為――そのようなものがあるとして――に対応する発語媒介行為などあるものだろうか。それを特定するのは不可能である。以上のささやかな観察から抽き出される教訓を忘れないようにしたい。オースティンの理論は字義性原理を暗黙のうちに前提している。彼の理論は字義的表現にしか及ばない。言語行為論の拡張を目指す企ては、なによりも暗がりに放置されたこの原理を照明することから始めなくてはならないのである[19]。

5　黙説のレトリック

それでは、〈割れた茶碗〉の反例は具体的にいってどのようなレトリックなのだろうか。私たちの見るところ、それは古典的な修辞学でいう〈黙説〉(reticence;aposiopesis)にほかならない。十八世紀フランスの修辞学者デマルセは、古代以来の伝統をうけつぎながらこの修辞技法の定義を次のように述べている。「黙説とは、思想を沈黙にゆだねることによって、あからさまに口にするよりも一層よくこの沈黙によって思想を知らしめる、というやり方である」と[20]。念のために、同じフランスに出た十九世紀の修辞学の大成者フォンタニエの定義もここで一瞥しておこう。彼によると、黙説は「文の流れの途中でとつぜん中断し、立ちどまることによって成立する。その目的は、それまでに述べたわずかなことにもとづき、また周囲の事態をたよりにして、その先はもう述べる気がないというふりをしている当のことがらを、じつは相手に理解させようとする、いや、はるかにそれ以上のことまで理解してもらおうとするところにある。[21]」〈黙説〉に関して中断も沈黙も交えずに語りつくした、これはみごとな解説ではないだろうか。これらの定義の眼目を繰り返すなら、〈黙説〉とは何かを語るためにあえて語らないことなのである。もちろん語らないといっても、初めから終わりまで口を噤んでいるのではそれこそお話にもならない。〈黙説〉が効果をあげるためには、中途までは語ることが必要である。一つの例をあげよう(これは、近年、修辞学への関心をよびさますのに貢献した、佐藤信夫氏の著書から借りたものである)。

……夜が明けたら、いや、いや、何もそんなに急ぐ事はないのです、妾はこうして書いている方へ行けばいゝ、書いてゐる方へはこんで行かれゝばそれでいゝ、でも何を書いたらいゝのだらう。……言葉はみんな、妾をよけて、紙の上にとまつて行きます。……一体、何んだらう、こんなものが、……こんな妙な、虫みたいなものが、どうして妾の味方だと思へるも

のか。妾は、もつと確かな顔をしたものにも、幾度も、裏切られて来た、例へば、……飽き飽きしました。ねえ、だから何か外の事を書きませう、だから、書いたつて書いたつて、ほんとにどうしたらいゝのだらう……ああ、妾は疲れた。疲れて、あの剥げつちよろけた空が見える。あの空こそは……何も出来ない証拠です……　（小林秀雄『おふえりあ遺文』）

この語り口が多くの中断と口ごもりをまじえてできているのは、一読して明らかだが、かてて加えてしきりに登場する「……」という記号は語りの中断と沈黙をことさらに示す言語の身振りなのであって、これほど〈黙説〉の技法にあつらえむきの記号もない。

それにしてもなぜ文章の流れが途中で遮断されてしまうのか。これについて古典的な修辞学は、話し手の感情の激したためであるとしている。古代ローマの修辞学の大家クィンティリアヌスも、黙説を「情緒や怒り」、「あるいは不安や配慮などを示す」表現形式として説明したというよしである。黙説が余情や余韻のために表現に沈黙をもちこむ技法だという理解も同じ趣にもとづいている。いずれにせよこのレトリックの効果は、基本的に、語りを節約すること、何かを隠すことによって逆に何かを明らかにし雄弁に語ろうとする仕組みに由来するのである。

〈割れた茶碗〉の例をふたたび観察してみたい。私は茶碗の破片を片づけずそのままにしておくという行いをなしたのであった。これは中断と沈黙の仕草である。妻をその現場に呼ぶ、散らかった破片を彼女に示す、娘に言及する、などの一連の言語と行為を私はあえて行なわなかったのだから。コミュニケーションの公然性が損なわれているというのは、行為の中断と沈黙がここに持ち込まれているかぎりにおいてである。この修辞的な効果はメタ意図が欠如してことや隠蔽されていることに由来するのではない。あるいはC意図の公然性に欠陥があるから効果が生じているのでもない。L意図の公然性がそもそも比喩的に生成しているのだ。誤解のないようひとこと付言しておこう。古典的な修辞学は言語中心主義に偏していたから、〈黙説〉というレトリックの仕掛けはそのままでは「黙した」表現一般（例えば表情や身振り）には適用できないのである。言語表現以外のコミュニケーション表現にこれを当てはめるには、もちろん〈黙説〉という概念を鋳造しなおす必要がある。そうした上であらためて事例(b)や(c)を観察すれば、そこに拡張された意味での〈黙説〉を明らかに認めることができるだろう。

6　公然性と沈黙の声

日常の言葉のやりとりが隙間のない〈語り〉で出来上がっているとする憶断は、生きられた言語と一度でもまともに向き合ったことのない、過てる理想主義にすぎない。しかしそれは何という理想なのか！ ものごとをたえずあからさまに語ることを得意とするのは、さしずめ機械かある種の精神疾患を病む者ではないだろうか。私たちの言語はつねに多少とも途切れ途切れである。それは例外なくどこかロごもりがちなものだ。どんなに雄弁な政治家でも司会者でも作

家でも教師でも、彼らの表現はその雄弁さのただ中にいくらか訥々とした気味をそなえている。なぜといえば、口ごもりそのものを表現の手段にしてしまう、これが人間言語の巧妙さだからである。語りがむしろ沈黙し、沈黙がむしろ語る。この逆説を小説からの次の引用ほど雄弁に物語っている例はない(出典は、椎名誠『続・岳物語』)。長くなるのをいとわず問題の件をここに書き写すことにする。番号や傍線などはすべて説明の便宜のために私たちが施したものである。

(1)七月に夏のシベリア横断の旅から帰ってきたあたりで、岳が急に大人びてきているのに気がついた。すでに声変わりし、顔つきになんとはなしの男の意志のようなものがあらわれてきた。一年前の夏、三宅島で釣りをした時にみた無邪気なあどけなさ、といったものはもうあまりみられなくなっていた。

私がいままでずっと風呂場で刈っていた素人床屋をいやがるようになったのはそのシベリアの旅から帰ってすぐの頃だった。乞食坊主のようにボサボサに伸びた頭を見て、私は何時ものように「そろそろ頭刈ろうか」と気軽なかんじで言ったのだ。

すると岳は「まだいいよ」と、私の顔を見ずに言った (a)。

そのときはそれで頭の話はしなかった。二回目は夏休みに入る直前だった。坊主からそのまま三ヶ月間ほど伸ばしっぱなしにしている岳の髪の毛は頭のてっぺんから裾の方まで同じ長さで伸びてしまっているので、裾の毛が耳に覆いかぶさるほどになっていた。

「さあ、そろそろ頭刈ろう」

と、私は言った。すると岳はそのときも私の顔を見ずに「まだいいよ」と言った(b)のだ。しかしその頭はもうどこから見ても「まだいいよ」という状態ではなかった。誰が見ても「もうダメだ」というようなムサクルシイかつら頭になっていたのである。

「まだいいじゃない、来い。一緒に風呂場に来い!」

と、私はなんだか妙にいら立ちながら、私を見ようとしないやつの顔を睨みつけた。

岳は私の勢いに圧倒されたのかそれ以上抵抗することなく、素直に私のあとについてきた(c)。

「そんなみっともない頭をしてどうするんだ」と、私は階段を下りながら言った。岳はふくれっ面をしていたが、黙って私の言うことを聞いた (d)。

何時ものように風呂場の流しの腰かけに座らせ、私はトレーナーの腕をまくった。そして岳に「シャツを脱げ」と言った。しかし岳は私に背を向けて、腰掛けに座ったまま、動こうとしなかった (e)。何時もだったら、私が電気バリカンの用意をしている間に、彼は素早く着ているものを脱ぎ、パンツ一枚になって私に背中を向け、おとなしく頭を刈られるのを待っているのである。(中略)

「脱がないでやるとそのシャツはもう着られなくなるぞ」

と、私は追いうちをかけるようにして言った。しかし岳は黙ったままだった (f)。そして

頑なに動こうとはしなかった（g）。

私は彼が腹を立てているらしい、ということを知って、私自身もすこし腹を立てはじめていた。そこでシャツを着たままでいいからかまわず刈ってしまおう、と思った。

この辺で引用をひとまず中断する。読んでお分かりのように、ここに出現する語られた言語、ないしスピーチの断片はつねに二人称的対話の状況のうちにある。言語がつねに状況づけられた出来事（situational event）であることは、言語分析にさいしてたえず念頭にされるべき眼目であろう。この場合の対話状況への参与者は、いうまでもなく物語の語り手である父親とその息子の岳とである。

言語分析のうえでもうひとつ銘記されるべき点がある。発話はつねになんらかの黙した仕草とセットになっている。言葉を口にすることは、それ自体言語的所作にほかならないが、この種の音声の仕草はそのまま非言語的な沈黙裡の所作へと延長され、それと渾然と入り交じながら意味をなす。発語とは独立に身振りの表出がなされるわけではないし、身振りはすでに意味を放散している。そして音声も身体のやってみせる仕草なのである。例えば(a)および(b)の箇所に、息子の言葉と仕草の複合が明示されている。そしてこの複合された記号表現がすでに〈黙説〉のレトリックを構成している。「まだいいよ」という岳の発語は父の呼びかけに対する謝辞ないし拒否の実演に他ならないが、その後を読んでわかるように、父の方はこれを承知しない。すなわち散髪を猶予してほしいという子の申し出はその父によって拒まれる。この局面で談話の流れを微分するかぎり、コミュニケーションは円滑に行われている。父の言いたいことは子に理解され、子の応答はやはり父によって適切に受けとめられている。問題は、息子が語り手の顔を見ずに言葉を発していることだ。言うまでもないが、聞き手の顔を見ないで言葉だけを差し向ける所作には、特別の意味が込められている。しかしこの意味作用は同定されたある種の所作のコード解読に由来するものではない。そっぽを向いてものを言うことが拒否や躊躇やその他、何らかの否定性の表出となるについては、コード化に先行する（あるいは潜行する）〈黙説〉の比喩が横たわっている。ふつうのやりとりの場合、聞き手の顔に自分の顔を定位する→（そうしながら）発語する、という（広義の）言葉の流れが予想できる。したがって、息子のこのふつうでない仕草はこの流れの中断と解すべきであろう。それはあたかも歌舞伎役者が舞台で大見得を切るようなものである。自然な所作の流れが中断され不自然な姿に身体を繕ったまま運動停止がなされるのだ。表現する身体の流れに意図的にもち込まれた中断と沈黙がむしろ雄弁に何かを語っているのである。

息子は父親の問いかけに終始沈黙で答えている。(c)や（e)では行為の沈黙によって。(d)や（f)では文字どおり緘黙によって。それはあまりに頻繁に生じるのでどんな迂闊な読者も気づかないわけにはゆかない。いや、これは読者だけの事実ではなく、何よりも語り手の知覚の体験であった。(c)では父親の命令に対して子どもが「素直に」応じたことが語られている。すでに息子は（a)ないし（b)によって父の指図に明確にノーと答えている。それゆえ「素直

に」父の後についていったことは、指図を受け入れたことを意味しない。それは面従腹背とも異なっている。そうではなく、(c)の意味しているのは、子どもが言葉で「いやだ」と一切言わないこと、沈黙を守ることなのだ。父の後について歩く行動は何か積極的にことをなすという意味での行為ではない。その後を読めばわかるように、息子は髪を父に切ってもらうために浴場に行くのではない。反対に、庇護の必要な無力な者に相応しい処遇としての身体ケアを庇護者から与えられるのはもう御免だ、もう自分は子どもじゃない、と父に言いたいためにこそそうしたのである。合理性の枠組みにおいて見るとき、この〈父の後について歩く行動〉がやはり見得のような行為であることが分かるだろう。つまりそれは自然な行為の流れに中断を持ち込み、沈黙によって何かを語ろうとするレトリックなのである。

7　「完全な表現」の幻想

引用した（1）の続きを読んでみる。父はかまわず息子の頭を鷲づかみにして、電気バリカンで首のうしろから髪を刈ろうとすると、息子は父の手首を制して振り向きざまに父を睨みつける。そこで、

（2）「なんだ！」
　と、私は言った。
「おとうはよ、こんなふうに勝手に自分の好きなようにヒトの頭を刈って面白いか！」
　と、岳は言った。何時になく強い調子だったので、私はすこしおどろいてしまった。
「どういうことだ？」
　と、私も成りゆき上すこし荒々しい口調で言った。
「おとうはよ、いつも命令ばかりだよな。自分の好きなように命令ばっかりしてよ、命令を聞かないといかって（怒って）よ、それでいかってばっかりいてよ」
　と、岳は言った。そこまで言うと鼻のつけねのへんを赤くして、私を睨みつけながらふいにボロボロと大粒の涙をこぼしはじめた(h)。（中略）
「なんだ？　坊主にされるのが厭なのか？」
　と、私は言った。
「そんなこと言っていないよ(i)」
　岳は私を睨みつけるのをやめ、さっきまでそうしていたように、風呂場の窓に向かって頭をいくらか下げ、しばらく黙り込んだ(j)。
「じゃあなんだっていうんだ」
　と、私は語気を荒くしたまま言った。
「なんだっていうんだよ……」

もう一度言った。

しかし岳は何も答えなかった(k)。黙っていることで、なんとなくやつの言おうとしていることが私にはわかってくるような気がした。私もすこし黙り(l)、次に何を言おうか考えた。しかし特に何か効果的な文句が浮かんでくると言うこともなかった。そしてその気配は何となくひとつのことにかたまりつつあった。

「もう坊主にするのが厭なのか？」

と、私はさらにもう一度言った。

「うん」

と、岳は私に背中を向けたままひくい声で言い(m)、足下のタイルを足の指でゆっくりなぞった(n)。

感情は高じたそのたかまりの極では音を失う。こうして、沈黙の密度にまで圧縮された感情が(h)では外部へほとばしっている。修辞学者が言ったように、〈黙説〉は激した感情表現に向いた修辞の技法である。感情の度のすぎる沸騰のためにかえって言語主体は黙して語らない。沈黙は語りの無なのではない。ちょうど任意の数にゼロを掛けた積がつねにゼロとなるように、あらゆる可能な表現を含意した表現のゼロ度なのだ。だから沈黙は矛盾さえ呼び寄せる。父が坊主にされるのが厭なのかと訊ねると、息子は(i)ではそれを否定し、(m)では肯定する。しかし時間をおいて息子の表現が自分の心に静かに沈殿したその後から考えれば、彼の言葉には何の矛盾もない。(i)で彼が拒んだのは、父なるものの支配であり、(m)で肯定したのはいっそう具体的に散髪のやり方や髪型というトピックについてなのである。この場面でも沈黙の気配はきわめて濃厚に漂っている。例えば(j)や(k)がそうであるし、沈黙の感化する力は聞き手にさえ及んでいる。(l)のように、父も黙って思索のひそかな表現をいとなむことを試みる。(m)～(n)は、(1)の例えば(e)と同じ行為の中断を構成する。それはバスケットボールの選手がシュートのために跳躍したきわみで身体動作を停止してしまうように、行為の流れを意味の力学的場の中空でまるごと停止してしまう離れ業なのである。なるほど、ここにはまだ発語が伴っている。だがそれは「低い声」でなされている。換言すれば、当該の行為の複合はほとんど声を失っているのであり、沈黙のメタファーに変質しているのだ。

沈黙と中断をふんだんに交えたこの事例は、コミュニケーションにとって例外をなすわけではない。私たちの営むコミュニケーションは、すきまのない語りとははど遠いものである。ここから言語理解の時間性に関してひとつの教訓を導くことができる。言葉と仕草が生成するのは絶えざる〈いま〉においてであるが、この〈いま〉はどのような構造をなすのだろうか。すくなくとも確かなのは、言語理解がリニアな逐次的時間順序にそってなされる操作ではないという点である。もしある発言を理解することが、音声的部門および文法的部門でなされるコード解読の問題にすぎないとしたら、沈黙の語りがどうして可能だろうか。まずもって、沈黙は表現のゼロ値であり、コード解読されるべきは記号表現ないし信号であるなら、沈黙は永久に

コード解読の対象にならないはずである。なぜなら沈黙は文字どおり表現しないことなのだから。

では語りの隙間や表現の余白そのものをメタ信号と見なし、この信号をコード解読すると見なすことで決着がつくだろうか。いかにも割り切った考え方だ。しかし、完全な表現と完全な余白の二分法こそを疑うべきではなかろうか。メタ信号をどのように同一指定したらよいのだろうか。あらゆる表現がつねにいくらかは沈黙を交えているとしたら、表現と沈黙を機械的に分離することなどできるものだろうか。

話し手が言葉を口にする。それは聞き手の耳にとどき、胸の内で反芻される。やがてその意味が聞き手の心の底に沈んで腑に落ちる思いが醸される。理解に要するこの〈やがて〉の時間は場合により一日かもしれないし、40年かもしれない。はるかな時間を隔てたおかげではじめて理解のとどく言葉というものがあるものだ。引用では、父親は子どもの初めの言葉と仕草(a)の意味をとりかねておそらく真の理解に数十分もかかったことが物語られている。もし、人間の言語理解が計算か何かだったら、(a)が字義的に語っている内容さえ把握すれば、その後のやりとりは無用となり何のための表現かがむしろ不可解になるだろう。その後のやり取りでも、父はしばしば理解に難渋とためらいを見せるかとおもえば、ほとんど子どもが何も表現していないのに、たちまち子どもの感情に同調してしまったりする。

どんなコード解読のモデルでも、言語理解がとるこの自在な時間性を説明できないだろう。モールス信号の解読の例に明かなように、コード解読はごく短時間に逐次的な処理として行われなくては意味がない(遭難救助の信号を受信者が10年かけて読み解いたとして何の役にたつだろうか)。大雑把にいって、コード解読は即時になされなくてはならない。コンピュータによる計算でたえず処理時間の短縮が問題となるのは、計算モデルの理想とするところが処理の即時性だからである。もちろん電子や算盤玉や何か物理的な要素を計算に使用する限り、即時性は理想にすぎない。どんなに短縮しても、処理の時間は有限である。それにしても、人間による言語理解の特有な時間性は、純粋に身体の物理的条件に由来するのだろうか。もとより身体として世界に住んでいる人間は物理的制約を克服しえないだろう(超能力のことはひとまず考えないでおく)。しかし物理的制約が理解の説明となるだろうか。将来はさておき今のところ、この問いに有意味な答えを差し出すことは科学者にとっても不可能である。説明があると確言するには、説明をやってみせることが最も有力でほとんど唯一のやり方であるかぎり。

公然性をつねに不徹底にとどめるという表現の戦略は単にレトリックの技法に特有なことではない。それどころか、表現があえて招き入れた沈黙によって公然性が未完なままに表現がなされてしまうという事態(incomplete overtness)はじつは——言語表現かそれ以外の表現かを問わず——表現一般の可能性に属している。なぜなら、すべてを語ることなどはどんな表現でもなしえないところだからである。表現に深く思いを潜めた現象学者メルロ＝ポンティは表現の理想と現実を混同すべきでないと戒めている。「完全無欠で余すところのない表現」という妄想を抱きがちなのが人間というものであろう。だが言語の現実についてみれば、そうした〈完璧な表現〉(expression accomplis)が、たんに成功したコミュニケーションにすぎない

ことが知れるだろう[22]。あたかも視覚の対象が無限のプロフィールをまなざしに開きつつ、それゆえにこそ具体的なものとして感覚器官に与えられるが、にもかかわらず決して根こそぎにされてしまうことがないのと同様に、そしてあたかも絵画が描かれた形と色彩によって表現するのに劣らず、描かれずにおかれた余白にものを言わせるのと同様に、一般に表現ということに完全性はないのである[23]。

私たちの見るところ、表現の公然性はあるかないかのどちらかという二値で特徴づけるべき属性ではない。たとえて言えば、この属性はグラジュエーションの構造をなしている。その一端はいわば純白のきわめて明瞭に公然的な極をなし、他端はまたきわめて明瞭に黒々とした非公然性の極をなすのである。しかしこの点をとらえて、公然性は寒暖や貧富のように単なる程度の問題であると無頓着にいうなら、誤りを犯すことになるだろう。黙説のレトリックにはっきりと示されているように、沈黙は語りの無化であるからこそ時には語りより雄弁であることができる。語られるはずのものを沈黙のうちにとどめしっかりと保持するからこそ、沈黙はものをいう。それは単に語りの欠如という無活動な状態ではありえない。もし寒さは暖かさの単なる欠如ではなくそれ自身が充溢した状態であるといい、正確にこの意味で寒さと暖かさは「程度の違い」をなすというのなら、その場合には公然性が程度の問題だと（そう言いたければ）言うことができる。もしあからさまにすべてを語りつくすことが表現の「完全性」の意味するところであり、グライスのように表現の意図との関連で特にこれを「公然性」と呼ぶなら、人間の表現にそうしたものを要求するのは、デカルトの神のように「無益であり不必要」だろう。実際に私たちのものの言い様は多かれ少なかれ黙説の気味をおびているのだから、公然性は表現にとって必ずしも必要ではない。それに、よしんば人間に完全に公然たる表現を行うことが可能だとして、ふつうの人間の表現が多少とも沈黙を交えて成り立っているのだとしたら、そんな表現がことさら何の役に立つのだろう。

8　公然性と黙秘権

ここで次のような疑念が出されるかもしれない。私たちの議論はやはり言語表現の特徴を無視しているのではないか、という疑いである。絵に省略があり、身振りに簡略化があるのは当然のことである。だがウィトゲンシュタイが述べたように、言語がおよそ何かを語りうるとすれば、それは一切を語る能力をもつはずである。だからこそ彼は、語りえないものについては沈黙しなくてはならないとの託宣を垂れることができた。言語表現の他の表現にない特権とは、まさに語り（saying）のこの意味での完全性ではなかろうか。

この疑念にきちんと応じるには、表現可能性（expressionability）ないし表現の能力という点から各種の表現を比較しそれぞれを評価しなくてはならない。そこで手始めに、表現能力の点であらためて絵と言語という二つの表現を比較してみたい。この課題にとってデネットの観

察はとても役に立つ。彼によると、絵は描かれた対象の一定の部分についてどっちつかずですますことができるという。細部が実際にどのようであるかを公然と表現することは、必ずしも絵画の義務ではないというのである。この意味で絵には原理的にいわば黙秘権が保証されているのだ。私たちは小説家が〈黙説〉の技法を多用することを見たが、このレトリックを表現媒体の異なる絵画のなかで駆使できるのはそのためである。例えば、ある男を描いたデッサンがあるとする。それは人間の姿をしておりどう見ても男性である（すなわち、それは馬ではないし女でもない）。ところが、この人物がネクタイ着用かどうか、この細部を絵はわざと描かないですましうるのである。

言語表現の場合はどうだろうか。言葉を用いてある男を記述する場合、なるほど彼がネクタイをしているかどうかには触れずにすますことはあるかもしれない。しかしこれはひとえにたまたま細部に言及しなかった結果である。なぜなら、その男に関するありとあらゆることを一度に言うことなどできない相談だからである。もし対象の全部を記述しつくすということに意味があるなら、この記述のためには無限の時間がかかるにちがいない。というのも、対象は無限の側面をそなえているはずであり、そのおのおのを口に出して描写するのに一定時間かかるとするなら、全部を述べつくすには、当然、限りない時間を要することになるからである。しかしいくら時間をかけてもいいなら、いくらでも詳しい描写を続けてゆくことができるだろう。こうして、個人には決して読むことも書くこともできないが、しかし複数の著者によって無限に書きつがれる未完の歴史書を、私たちは空想の図書館に所有することさえできるのである。

これにひきかえ絵の場合には、細部の処理の可能性には、それを明示的に描写するかやはり明示的にぼかすか、どちらかしかない。絵のその箇所を明示的にぼかしたのは偶然によるのではなく、表現に身を投じた者の選択の問題である。もし彼がその部分を描き込みたいと決意さえすれば、原理的にそれはいつでも可能である。もちろん彼に描写の力量があるかどうか、描写の手段（例えば、絵筆や絵の具）が与えられているかどうかを初め、他にも多くの条件が揃わなくては実際に表現をおこなうことはできない。とはいえこれらの条件が完備しているなら、細部の描写をするしないかの選択はどこまでも画家にゆだねられている。従って、絵に男の帽子が描かれているのにネクタイがそうされていないのは必ずしも偶然ではない。画家が故意に描かなかったのかもしれないのだ。このかぎりで、絵画表現にはつねに黙秘権がともなうのである。ところが言語の可能性はこれとは異なり、明示的に記述するか非明示的に記述しないか、いずれかでしかありえない[24]。

もしデネットの観察が正しいなら、私たちは言語表現の特異な機能を新たに発見したことになる。言語表現の完全性とは、すべてを一度に語りつくすなどという法外な働きをいうのではない。言語には原理的に黙秘権がないことをいうのである。いつでも包み隠さずすべてを述べるのが言語表現の特異性だということになる。こうして見ると、デネットが問題にした言語の原理がグライス流の記号論の原理として私たちが問題視した〈公然性〉と同工異曲であることは明らかであろう。

ところがデネットのこの見解についてはブロックのまことに犀利な批判がある。私たちの見るところ、言語表現に公然性を独占させるというデネットの望みはこの批判によって断たれたといっても過言ではない。ここでその要点を紹介し、表現の〈公然性〉に関してどのような結論を引き出せるものかを明らかにしよう。

ブロックの指摘するように、デネットの言い分とは異なり、細部の描写に関しては絵も言語と同じ権能しかもちえないのである。確かにデネットの言うように、言葉による描写が一定の細部に及ばないのは作為にはよらない。ある細部描写がないことから、語り手が明示的に描写をなさなかったという結論は導かれないのである。ところでこの事情は絵でもまったく異ならない。明らかにズボンを着用しているがネクタイは描き込まれてはいない男の姿のデッサンがあるとする。この絵から、画家が故意にネクタイを描かなかったという結論は引き出すことができない。もちろん可能性を云々するなら、ネクタイの着用の有無は故意に描かれなかったのかもしれない、ということはできる。しかしその人物の体温やズボンの重量をデッサンに描いていない事実は、決して作為・不作為の問題ではない。対象のそうした特性については、絵画の黙秘権もなにもない。言語が一定の範囲でしか記述をしないように、絵もおのずと一定の範囲でしか描写を行なわないというまでなのである[25]。

デネットは絵画に関して形や色などの視覚的特性だけを問題にしていた。その点を逆手にとってブロックは異義を申し立てたのだが、これはフェアなやり方でないという印象をいだく読者がいるかもしれない。ところが、話を視覚的特性だけに限っても、やはり同様の指摘を繰り返すことができる。どんなに細密な描写をおこなうにせよ、その絵にはおのずから（故意ではなく）描ききれない残余がつきまとうのではなかろうか。「男が町を歩いている」という記述はその人物がネクタイをしているかどうかについて無関心でいることができる。まずもってこの可能性が言語表現に属するからこそ、そもそも〈黙秘権〉が文字どおり言語の権利として構成されるのである。〈黙説〉というわざとらしい方法が可能になるのも、どんな表現にもつきまとう細部への本質的な無関心のおかげである。この事情は絵画でもすこしも変わらない。人物が歩いているところを描いたデッサンは人物の体温には無関心ではなかろうか。しかし、対象から輻射する赤外線を画像処理する機器を使用して、体温を描いたデッサンを得ることは技術的に簡単なことだろう。実際にサーモグラフィーという名の類似の装置が医療などの分野で利用されている。このデッサンにネクタイが描かれていないとしても、それは人物の体温には関心があるが装身具には無関心だからにすぎない。結局、言語表現とその他の表現に〈公然性〉の点できわだった差異はないと言わざるをえないのである[26]。

9　水準の現象

表現における〈公然性〉の概念をここでひととおり整理しておくことにする。まず確認すべ

き点は、どのような表現もつねに表現しきれない残余を多少とも蔵しているということである。表現には必ず余白がともなうものだ。余白とは表現しないという表現なのである。それはいわば、意味をまっとうするための不可欠な機能の遊びだといってよい。あたかもハンドルの遊びが車の円滑な操縦に不可欠であるように、意味機能に隙間があるからこそ、表現はたくみに意味をおこなうことができる。どんな表現の場合も、公然性を余すところなく記号表現のなかに絞りだし注ぎ込むことなどありえない。全部を言わないこと、描かないこと、沈黙をまもることが、かえって何かを言うこと、描くこと、語ることを可能にするのである。完璧な表現を回避することによってむしろ本来の公然性がこの表現にもたらされることになる。そうするお陰でかえって表現にほどよい公然性が宿るのだ。真の意味での表現の公然性とはあらいざらい表現することではなくて、どこまでも表現のほどのよさなのである。

したがって公然性はもっぱら〈水準の現象〉である。描き込みすぎたり語るのが過度にわたると、その表現は冗長となり意味の生気を失うものだ。スペルベルたちが〈意味〉という概念とは別に〈有意性〉という概念を構想しなくてはならなかったゆえんである。有意性もまた水準の現象にほかならない。あまりに隙間のない表現はむしろ無意味になってしまう。その逆に、描かれたものとのバランスを失するほど余白が多い場合には何を描いているのか分かりにくくなる。アンバランスの程度がさらにつのれば、やはりその表現は無意味になるだろう。しばしば議論の的になってきた〈省略〉や〈間〉の美学は、表現の完全性の水準という視点からあらたに構想することが可能である[27]。完全性ないし公然性が表現の有意性を損なわない水準にとどまるとき、そのときにかぎりこの公然性は字義的である。こうしてここでも表現と〈有意性〉概念との際会がある。

こと人間が生きるかぎりでの表現に関しては、「客観的に字義的な表現」なるものはない。そうした客観主義とリアリズムは表現の理論を台無しにしてしまうだろう。ある認知環境の中に住む表現主体から見て適切な有意性をともなう表現こそが字義的表現になりうるのである。もちろんその逆は成り立たない。字義性がつねに有意性をともなうとは限らないのである。けれども、字義的であって有意でない表現は真の意味で人間の表現ではないと言うべきであろう。その種の字義性は人間の経験と理解の臨界を越えてしまっている。

さて〈黙説〉の場合、公然性の本質たるその不完全性、つまり公然性の条件としての〈余白〉ないし〈沈黙〉が、表現に要請される有意性の水準を損なう程度に及んでいることがわかる。表現の主体は自分の意図をある意味で隠しているのである。しかも同時に〈黙説〉のパフォーマンスは、水準をひどく逸脱するあまりあらゆる意味を喪失するという、反コミュニケーション的結末だけは避けようとする目論みをともなっている。それは一通りの字義的意味をもつための有意性をそなえてはいるが、しかしこのパフォーマンスにちりばめられた中断と沈黙によって、それに本来そなわるはずの有意性の最大値が損なわれてしまう。こうして、表現の受け手は失われた有意性を回復するべく解釈メカニズムを発動するだろう。

理論の獲物をひとすじに追い求めた今回の狩りの首尾はどうだったろうか。もし私たちにし

て獲物の点検にぬかりがないのなら、ここまでの狩りのドキュメントは現代的な観点から構想された記号論の輪郭を含んでいるはずである。冒頭に述べたことの繰り返しになるが、私たちのこの試論は、探究に先だってあらかじめ設定した六通りの表現の断片をほとんど唯一の頼りとみなしたが、事実もその通りであった。グライスの記号論ならびにスペルベルとウィルソンの有意性理論のおのおのがこれらの表現にどこまで理解可能性を付与できるものか、私たちはこの問いをひたすら問いつめようとしたのである。ただそれだけの仕事を果たすために、私たちにも思いがけない省察の手間暇がかかることになった。もちろん現代的な記号論の構想をいっそう明らかにし理論の骨格をそれにまとわせるためには、この何倍もの思索の労苦を払う必要があるにちがいない。だが私たちがはるかに眺望したのは理論よりむしろ構想である。これら六つの表現を理解するとはどういうことか。旧来の理論がこの問いに満足のゆく答えを与えることができない一方で、私たちの構想が問いに理解可能性をもたらすかぎり、狩りの獲物は私たちの手中にある。

冒頭でなされた約束を果たすために、ここに二葉の図と一つの表を掲げることにする。これらの図は、グライスの系譜の記号論がおこなった意味の分類（自然的意味と非自然的意味）と、私たちによるそのオルターナティヴを表している（図１と図２）。古典的記号論が依拠する基本の〈対比〉が《自然／人為ないし文化》であるとすると、代替案の基軸をなすものは《字義的／非字義的》の対立であることに注意していただきたい。そしてこの表は、グライス、スペルベルとウィルソン、そして私たちの三者がそれぞれの事例をどのように分析したか、その要約を示している（表１）。私たちにしてふたたび表現とその理解とを探索する機会が恵まれるなら、これらの獲物が新たな狩りに私たちが乗り出すための装備となるだろう。ともあれ、今回の私たちの旅はこれでひとまず果たされたことになる。

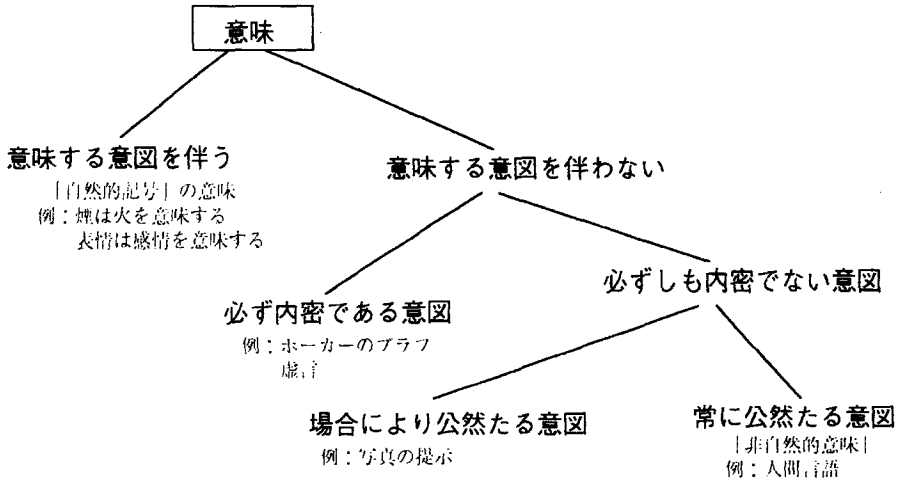

図１：グライスによる〈意味〉の分類

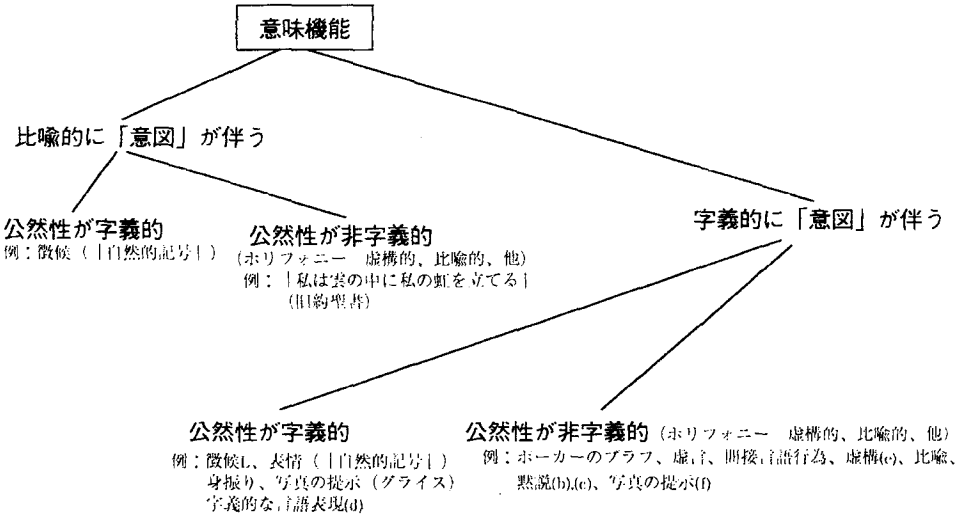

図２：「意図」との関連における〈意味機能〉の分類

表１：記号認識の展開

コミュニケーションか？　あるいは、「言語」の意味をなすか？

事　例	古典的記号論 CS グライス		有意性理論 RT スペルベルとウィルソン			現代的記号論 MS 本論文		
		MSから見て	RTから見てグライスの本来の評価は	RTによる最終評価	その理由	MSから見てRTの本来の評価は	RTが、各事例の公然性の字義性について、	MSの評価
(a)（子どもが母に訴える）表情	−	メタ意図の不充足	− きつすぎる	(+)		+	+	+
(b)壊れたドライヤー	(−)	メタ意図の欠如	+ ゆるすぎる	?	C意図の公然性に欠如	−	−	+
(c)割れた茶碗	−	メタ意図の欠如	+ ゆるすぎる	(?)	C意図の公然性に欠如	−	−	+
(d)永久機関	(+)	効果の誤認	− きつすぎる	(+)		−	+	+
(e)芝居の台詞	(+)	効果の誤認	− きつすぎる	(+)		−	−	+
(f)浮気の写真	−	メタ意図の欠如	− 適切である	(−)	C意図の失効	−	−	+
		という点は共通の理由がグライスの評価には	となるはず。それゆえ、グライスの条件はRTの最終評価からして、右のように形容できる。			となるはず。なぜなら、RTが（明白さ）の規定を誤っており、また	となるのを考慮していない、という二つの理由による。	
		あった、と思われる。						

注　・＋は肯定，－は否定，？はいずれでもないことを表す。
　　・評価に括弧したのは、そのままの事例がテクストに出ていないことを表す。

注

(1) D. Sperber and D. Wilson, *Relevance*, Oxford Universtiy Press:Basil Blackwell, 1986, p. 30.

(2) H. P. Grice, 'Meaning,' reprinted in P. E. Strawson, (ed.), *Philosophical Logic*, London:Oxford University Press, 1967, p. 43.

(3) ある箇所に要約された言語の意図の分析（*ibid.*, p. 45）が、別の箇所で示されたもの（p. 43）とどう違うのか、筆者にはわからない。

(4) *ibid.*, p. 45.

(5) *ibid.*

(6) サールがこの区別に触れている。J. Searle, *Intentionality*, p. 13.

(7) H. P. Grice, *op. cit.*, p. 43.

(8) *ibid.*, pp. 43-44.

(9) D. Sperber and D. Wilson, *op. cit.*, p. 30.

(10) P. E. Strawson, 'Intention and convention in speech acts,' *Philosophical Review* 73, 1964. Reprinted in J. Searle, (ed.), *The Philosophy of Language*, Cambridge University Press:Cambridge, 1971, pp. 23-38.

(11) *ibid.* そこには「メアリの第一階の伝達意図を認知せしめようとする、第二階の彼女の意図はピーターから隠匿されている」という文が読める。

(12) *ibid.*, p. 61.

(13) *ibid.*, p. 62.

(14) F. Récanati, *Enoncés performatifs*, 1981, Editions de Minuit, p. 154, p. 211f.

(15) J. L. Austin, *How to Do Things with Words*, Oxford:Oxford University Press, 1962, p. 104, p. 121.

(16) *ibid.* p. 104.

(17) デイヴィドソン、ローエベンバーグ、ワーナーなどが提唱した見解である。ちなみに、〈言語使用〉ないし〈行為〉としての隠喩とは何かについて、筆者は、言語行為論の拡張という問題を見据えながら考察を試みた（『メタファーの記号論』、勁草書房、1985、第9章、を参照）。

(18) *ibid.*, p. 101, p. 109.

(19) ただし、レカナティの構想したままでは字義性原理を維持できない。表現領域は、一方で言語表現とそれ以外の表現、他方でコミュニケーション表現とそれ以外の表現にそれぞれ区分される。彼の字義性原理は言語表現に妥当するにすぎない。だから、それ以外の多様なコミュニケーション表現（例えば表の事例 (a), (b), (c), (f)はすべてこれに含まれる）に適合するようにこの原理を拡張する必要がある。そのためにはもとの原理の定義の中の「発語内行為」、「潜在力」、「文」をそれぞれ手直しすればよい。具体的に言えば、「発語内行為」を「表現」（あるいはそこまで一挙に拡張しないで、さしあたり「コミュニケーション行為」にとどめておくことが堅実な理論構築という目的には望ましいかもしれない）に、「潜在力」を拡張された意味での「潜在力」に、そして「文」を「記号表現」に変更する必要がある。レカナティの提案を「字義性原理」と呼び続けたいなら、新規に編成された原理を「拡張字義性原理」とでも命名して、混同を避けるべきであろう。いずれにせよ、これらは今後の問題に属している。

(20) Fontanier, *Les figures du discours*, publié avec une introduction par G. Genette, Paris:Flam-

marion, 1977.　この訳は、佐藤信夫『レトリック認識』(講談社、1981)、33頁の引用にしたがう。同書は〈黙説〉について古典的修辞学の立場からする周到な解説を含んでいる。

(21) Dumarsais, 《Figure》 dans l'*Encyclopedie* (1751-1756), imprimé dans *Des Tropes*, avec une présentation, notés et traduction par F. Douay-Soublin, Paris:Flammarion, 1988.

(22) M. Merleau-Ponty, *Prose du Monde*, Paris:Gallimard, 1969, p. 41.

(23) *ibid.*, p. 52f.

(24) D. Dennett, *Content and Consciousness*, London:Routledge and Kegan Paul, 1968, p. 135.

(25) N. Block, 'Introduction:What is Issue ?,' in N. Block(ed.), *Imagery*, Cambridge and London:MIT Press.

(26) 以上については別の機会に述べたことがある。拙稿「イメージ概念・再考」、『年報人間科学』第9号、大阪大学人間科学部、1988、11頁～13頁。

(27) 私たち日本人は、日常生活、武術、芸術の三つの領域で〈間〉の原理をはなはだ尊重してきた。〈間〉についての多方面からする考察として、南博編『間の研究』(講談社、1983)は類書には見られない的確な観察によってきわめて啓発的である。ただ本書の論調が〈間〉を日本文化に固有なものとして強調しすぎているのは気になる。察するに、〈間〉という用語が顕在化しているかどうかはともあれ、生きられた概念としての〈間〉は洋の東西を問わずかなり普遍的なものではなかろうか。日本文化がそれを高度に洗練した点は疑い得ないとしても。私たちが〈間〉にある種の普遍性を予想するのは、それが一般に人間の表現可能性の制約に由来するカテゴリーだと考えるからである。

SAYING AND SILENCE

What does it mean to understand representations?

Tateki SUGENO

The objective of this paper is to examine the validity of two types of semiotic thought, i. e., the Grician theory of language understanding and the Theory of Relevance of which D. Sperber and D. Wilson are co-proposers. We construe a certain kind of communicative performance as the touchstone of these theories. Suppose that Mary wants Peter to mend her broken hair-drier, but does not want to ask him openly. She begins to take her hair-drier to pieces and leave them lying around as if she were in the process of mending it. She does not except Peter to be taken in by this staging; in fact, if he really believed that she was in the process of mending her hair-drier herself, he would probably not interfere. She expects him to be clever enough to work out that this is a staging intended to inform him of the fact that she needs some help with her hair-drier. However, she does not expect him to be clever enough to work out that she expected him to reason along just these lines. We will call this example the "Broken Drier Case" (See, D. Sperber and D. Wilson, *Relevance*, London:Basil-Blackwell, 1986, p.30).

According to Grice, one cannot count the Broken Drier Case as a linguistic expression which naturally conveys a non-natural meaning, because this type of performance doesn't involve a meta-intention to inform the audience of performer's informative intention to inform the audience of something.

Sperber and Wilson, however, in the one hand make a judgment that the Broken Drier Case is a counter-example to the Grician theory of language, because the audience may recognize the meta-intention of the performer or speaker in the situation of the Case. They construe themselves the Broken Drier Case as not being a linguistic expression, because the meta-intention, which they call the "communicative intention" from their own theoretical viewpoint, is in fact concealed from the audience. In other words, according to the Relevance Theory, in the Broken Drier Case the overtness of the performer's intention suffers heavy damage so that the performance cannot work as human communication.

It is strange, however, that Sperber and Wilson on the other hand construe the Case in question as "not quite communicating" (*ibid.*, p. 61). Namely, they do admit the Case as an example of communication more or less conveying non-natural meaning. We might think that the Broken Drier Case is a genuine paradox to the Relevance Theory rather than a counter-example.

We propose to revise the principle of literalness of F. Récanati in order to find out a solution to this paradox. Récanati argues that a speaker abides by the principle of literalness, according to which one should not utter a sentence with a given illocutionary act potential if one does not intend to perform an illocutionary act falling under that potential(F. Récanati, *Meaning and Force*, Cambridge:Cambridge University Press, 1987, pp. 128-9). We think that this principle should be enlarged to cover non-linguistic communication such as bodily gesture or facial expression. If we admit a category of communicative performance which is done overtly but not literally, the paradox may find a solution. Contrary to what Sperber and Wilson argue, The Broken Drier Case involves a manifest linguistic intention but is performed *rhetorically*.

Traditional rhetoric has attached as much importance to silence as to saying. We can express rather sufficiently by avoidance of expressing all we know or feel or more than necessary. Rhetoricians call this type of rhetoric "reticence" or "aposiopesis." Modern linguistic theory and semiotics are quite ignorant that silence is part of human expression. We argue that we should reconstruct disciplines concerning language and representation from a rhetorical point of view